# 「白馬の騎者」について

田川基三

## 一

シュトルムが彼の最後の完成作品である「白馬の騎者」„Schimmelreiter“の計畫を立てたのは一八八五年（死の三年前）のことだった。彼は書き始めるまでに周到な準備をととのえ、熟慮を重ねた結果、ようやく筆をとったのは一八八六年の七月の初めであった。その間に「白馬の騎者」よりも比較的容易な小説„Bötjer Basch“と„Ein Doppelgänger“にも手をつけて、先ずこのほうが先に完成した。「白馬の騎者」は秋にまた書きつづけられたが、十月には病に倒れて數か月間床についたあげく冬の終りにようやく快方に向いはしたが、「白馬の騎者」のほうは後まわしにして、これとは全くちがった型の小説„Ein Bekenntnis“のほうを先に書きあげた。そして一八八七年の聖靈降臨祭の後に、やっと再び「白馬の騎者」を取り上げ、たえず肉體の衰弱と、その頃すでに始まりつつあった癌疾の激しい痛みに耐えつつ書きつづけ、翌八八年二月九日（死の五か月前）に遂に書き上げた。以上のような事情はあるにせよ、これはほとんど一氣に書かれたシュトルム最大の力作である。

この小説の素材についてシュトルム自身が述べている言葉には、かなりの矛盾があるようである。„Lena Wies“という小品の中で、彼は少年の頃よくお伽話をしてもらったパン屋の小母さんのヴィースから「津波の荒れ狂う夜、

堤防の上に姿をあらわし、災禍がせまると、馬もろとも堤防の裂け目へ飛びこむ白馬の騎者の幽靈傳説」を聞かされたことを書いている。これに反し小説「白馬の騎者」の冒頭では、市參事會員夫人であった曾祖母フェッダーゼン（シュトルム自身の曾祖母のことである）の家で「ライプツィヒ選集」だか「パッペのハンブルク選集」だかの何れかで、この話を讀んだという風に書かれている。また娘のリースベトにも一八八五年二月二十日の手紙で、子供の頃「恐ろしい堤防物語」を讀んだことを語っている。しかし最近の研究によれば、シュトルムは子供の頃にも、また曾祖母の生前にもこの傳説を讀んだ筈はなく、彼が確かに讀んだと考えられる話は一八三八年の „Lesefrüchte vom Felde der neuesten Literatur des In- und Auslandes“ に出ている „Der gespenstige Reiter. Ein Reiseabenteuer“ であろうと判斷される。するとシュトルムは當時すでに二十才を過ぎていたことになる。

それは大要つぎのような話である。

## 幻の騎者

一八二九年の四月初旬のことでした。――と私の友人は語りました――私は重要な用向きで、悪天候を冒してマリーエンブルクまで行くことになりました。借りうけた栗毛の馬に跨って家を出たのは午後四時でした。そして数分後にはダンツィヒを後にしていました。道はよかったのですが風は冷たく、不愉快な雨に惱まされました。身體は凍えきり、ずぶ濡れになって、もう可なり暗くなってからディルシャウに着き、近くの宿屋で馬を下り、温かい飲物と食事に疲れをいやしました。宿の主人にワイクセル河の様子をたずねると、非常にわるくて、河を越すことは困難なばかりか危険でさえあるといいます。しかし私は是非とも目的地へ、出來ればその夜の中に着きたかったので、押して宿を出發しました。しかしワイクセル河の岸辺へやって來ると、進んで死を選ぶならばともかくも、とうてい渡ることは出來ないのを知りました。しかしギェットランドの渡しまで馬で行けば、河を越すこともあながち不可能ではな

かろうといわれましたので、すぐさま出發しました。あたりはいよいよ暗くなり、ただ時々霧を通して星のまたたきが見られました。あたりは不氣味な暗闇で人影ひとつ見えず、暴風の咆哮と氷の割れる音とが聞えるだけです。するどそのとき背後に蹄の音がしたので、道連れが出來たとよろこんで ふり返って見ましたが、何ひとつ姿は見えません。しかし蹄の音はいよいよ近づいて來ます。私の馬はあらい鼻息をたてて足搔き、いくら拍車をあてても動こうとしません。思わず冷たい戰慄が身内を走りました。やがてその馬は走りすぎたらしく、蹄の音は私の前方で聞えました。ほっと安堵するのも束の間、例の馬はまたもや引返して來たらしく、私の側をまた不氣味な音をたてて掠めすぎました。そして、おぼろげながら、白馬に跨った黒っぽい人の姿が見られたのです。悪寒が背筋を走り、私の乘った栗毛の馬は横ざまに跳びのき、もう少しで私は馬もろとも堤防の下へ轉げおちるところでした。

そのとき遠くで犬の鳴き聲が聞え、燈が一つ認められました。私は救われたような氣持で、その光を目ざして馬を進めました。それは番小屋でした。馬を下りて中へ入ると、大ぜいの人が集まっていました。私が一夜の宿を乞うたところ承諾してくれました。私はよろこんで馬を裏につなぎ、部屋へ入って行きました。そして氷の見張りに集まっている土地の人たちの話に耳を傾けたのです。しかし私の出會った不思議な出來事については、みなの物笑いになることを恐れて何も話しませんでした。

するとそのとき窓のそばを何かが通り過ぎるような音がしました。多くの人々は驚きの叫びをあげて立ち上りました。その中の一人は「何處かに危険が迫っているにちがいない。白馬の騎者が現われたから」といいました。そして大抵の人は外へ飛び出して行きました。そこで私はかたわらに坐っていた一人の老人に、今の話について詳しい説明をもとめました。そして私は次のような話を聞いたのです。

「ずっと昔、我々の先祖たちも危険な流氷の見張りにこの小屋に集まっていた頃のことです。仲間のうちの勇敢で見識のある、皆からも好かれていた一人の男が堤防監督官の役を司っていました。或日のことでした。浮氷が水門

につまって水かさは次第に増し、危険が刻一刻とせまって來ました。一頭の立派な白馬に跨っていたその監督官は、四方八方を駆けめぐり自分の眼で危険を確かめては、その防禦のために正確適切な指示を與えていたのです。しかし人間の微力は、自然の恐るべき力の前には所詮屈服せざるを得ず、水は堤防をつき破って侵入し、恐るべき損害を與えました。打ちのめされたような氣持で決潰個所へ馬を走らせてみますと、堤防の割れ目から水は怒濤のように肥沃な原野へ流れ入っていました。彼はこの方面の見張りをぬかっていたことを嘆きました。そして彼はすっかり絶望におちいった様子でした。やがて彼は馬に拍車をあてたかと見ると、馬もろとも割れ目めがけて身をおどらせ、影も形も見えなくなりました。しかし、この人も馬も、未だに安息が得られないと見えます。何處かに危険が迫ると今でもなおその姿を現わすのです。」

私はその翌朝また旅に出ましたが、白馬の騎者にはもう出會いませんでした。しかし今の話にあった、あの年のひどい洪水の跡をまのあたりに見たのでした。

このような素材をシュトルムは十九世紀中頃の北フリースランドに移しかえて、作品の長さからいえばまさに長篇小説に匹敵する、しかもすこぶる劇的な要素に富んだ小説を書き上げたのである。

## 二

「白馬の騎者」は素材的にも形式的にも、從來のシュトルムの作品とは、いささか趣を異にしている。それは傳説でもなければ童話でもなく、市民生活や農民生活を描いた現代小説でもなく、さりとて歴史小説でもない。もとより戀愛小説ではなく、問題小説ともいいきれない。一つの悲劇的運命小説にはちがいないが、以上のすべての要素を少しずつ含んだ獨自の作品といわねばならぬ。ここには北方的な風土と人間との間から、現實的であると同時に超現實

的な世界が描き出されている。描寫はきわめて具象的客觀的で、現実生活に即していながら、我々を取りまくものはまさに北方的神話的現實である。

シュトルムはこの作品以前にも、運命との戰いに自己を主張し、自己の力を示そうとする積極的行動的な人間をすでに描いてはいるが、特にこの作品では、運命との戰いというテーマに獨自の方向を與えて、きわめて力強い描寫を示している。主人公ハウケ・ハイエンは、自分に向ってやって來る運命に堪えるのみならず、自らも進んで運命に挑みかかり、いわば自身で運命をつくり出している。

ハウケの戰いの第一は自然の強大な力との戰いである。この作においては、自然はもはや牧歌的美しさをもつ世界ではなく、盲目的破壊力と見なされる。自然は人間の敵なのである。そして、ここでは自然は何よりも海によって代表されている。海は人間の住いうる領域ではなく、舟の通い路でもなく、生活の糧の源泉でもない。„Eine Hallig-fahrt“におけるようなローマン的、異教的な魅力も持たず、„Psyche“にみられるような藝術家的憧憬の對象でもない。海は堤防を破壊し、人間を溺死させる。海は「白い波頭を立て、荒野に住むありとあらゆる恐ろしい猛獸の咆哮をうちに含むもののように、吼えながら押し寄せて來る」のである。しかも、この破壊の祭典の後に、自然は再び「金色の太陽の光」にほほえんだりする。このような自然の暴力を向うにまわしての戰いから、ハウケの運命の歩みが始まり、この力によって彼はついに破滅する。しかも彼はこの戰いに、積極的創造的に應ずることによって、不可避的に第二の戰い、即ち人間社會との戰いに入って行く。そして彼のになう悲劇的矛盾は、彼の事業が社會のためのものであり、社會の力を借りてはじめて爲されうるのに、まさにそのために社會秩序の根本法則を破らねばならぬ点にある。新しい冒険を企てようとすれば、必然的に古い權利を侵害し、傳來の慣習にそむき、力の均衡を破らねばならない。しかし、原因は彼の行爲にのみあるのでなく、彼の人間にもある。彼はあまりにも衆にぬきんでた存在であるために、永遠に社會と對立しなければならない。たとえ社會が彼を必要としても、彼はその存在によってすでに社

會秩序をおびやかす。それゆえ社會はながく彼に堪えることが出來ない、否ゆるされないのである。これは昔から絶えずくりかえされる個人と社會、偉人と凡俗との間の葛藤なのであり、本來悲劇的破局の可能性を内にぞうする避けがたい戰いである。第三の戰いは積極的に攻擊する戰いではなく、消極的に堪えしのぶ、いわば受身の戰いである。運命として彼に負わされたものとの戰いである。それは妻のエルケの病氣、一人娘ヴィーンケの精神薄弱、ハウケ自身の病氣のように、不可解な定めとして彼の身に降りかかる運命である。彼にとっては暴風や海の偉力や、彼に對する村人たちの反抗のような外的な力よりも、彼を内側から切りくずすこのような運命の方が、いっそう致命的であった。彼を打ち碎いたものは外ならぬ妻子の死である。それは、いわば闇のなかから彼に摑みかかり、彼の安息の場をうばいとる宿命であった。この定めによってはじめて明らかとなった事實は、神が彼の行爲を望まれず、彼の犧牲を要求されたということである。

自ら選んだハウケの死は罪の贖いと見るべきであろうか。もしそうだとすれば、いったい何處にその罪はあるのだろう。暴風の夜、古い堤防がちようど新しい堤防との接合點から崩れたとき、群衆の中から一人の男がハウケに向って叫ぶ。「あんたの罪だ、堤防監督官。あんたの罪だ！　この罪を負って神様の前に出なさるがよい！」この男のいう意味は、ただハウケが新しい堤防を切り通すことに反對したために、古い堤防とその背後の土地を危くしたということだったかもしれない。しかしハウケ自身は、堤防の修理の不十分さを自分の責任と考えており、「堤防のその個所が外に現われた良心の呵責のように」思われたほどだが、それもやはり彼自身の病後の氣の弱りから人々の妨害に負けた爲だと考えた。そして彼は大聲で叫んでいる。「神さま、私は告白いたします。私は職務の遂行に怠慢でした！」シュトルム自身もハウケの眞の罪はこの點にあると見ているらしい。一八八八年四月七日の友人テンニエス宛の手紙で彼はこういっている。「堤防監督官が世論との戰いに敗れた爲の破滅であるという點をもっと強調すれば、彼の罪はあまりにも弱くなるだろう。私は彼が肉體的に弱り、何時までも戰うことに飽き、これ迄はつねに防ぎ通して

來たものを、ついなおざりにしたのだと考える。おまけに、昔間もう一度現場を點檢してみると、それほど心配でもないらしく思えたのだ。ところが心の迷いと良心の呵責とにせめられている間に、もう破滅がやって來たというわけだ。罪は彼にある。しかし人間として許される罪だ。」しかし、これではハウケの罪の十分な説明とはいいがたい。「あんたの罪だ！」という叫びの中には、ハウケに對するすべての人々の非難の氣持がこめられている。ハウケの行爲がそもそも昔からの掟に背くものであって、すでに堤防構築という企てが神及び人間に對する不遜な行爲であり、この點で彼は神の怒りをまねく罪を犯したと見ることも出來る。そうすれば彼の存在、本質、行爲のすべてにつながる根源的な罪に外ならず、彼の犧牲死もこの點から説明される。

ハウケは最後の試練の瞬間に勇氣を振い起こし、自分の事業の勝利をさえ意識する。そして思わず歡呼の聲を發する。「ハウケ・ハイエン堤防、こいつはきっと保つぞ！　百年たっても大丈夫だろう！」しかし夫の安否を氣づかうあまり嵐をついて出て來た妻と子が、堤防をつき破りなだれこむ水の渦の中に、馬車もろとも呑みこまれてしまった時、はじめて「おしまいだ！」と叫ぶ。そして彼が自ら死を選んだのは、妻子の死によって「心の最も神聖な内奥」である家庭が消滅し、もはや生きる力も喜びも消えうせた爲ばかりではない。自分の血をわけた、このような罪なき者たちの死によって彼に明らかとなったことは、破壞された秩序を回復する道は、もはや救いの手を差しのべることではなく、ひと思いに自らの生命を斷ち切ることだ、ということだった。こうしてハウケは最後まで自らに背くことなく、己の意志を守り通したといわねばならぬ。「彼はすっくと身を起こして、白馬の脇腹に拍車をあてました。馬は棒立ちになって、今にも倒れそうになりました。しかし騎者の力がそれを抑えました。『進め！』と彼は叫びました。しっかり馬を進めようとする時に、何時もそう叫ぶように。『神さま、私をお召し下さい！　そして他の人たちをお守り下さい！』」これがハウケの最後であった。

こうしてハウケは自らの死によって、彼が生前に全力を傾注した事業に終止符をうったのである。しかも彼は自ら

意識せずして、古くからの民間信仰による堤防の人柱の役目をはたしたのである。さらに運命の皮肉は、彼が以前に小犬のペッレを同じ犠牲から救ってやったその同じ場所で、深淵に自ら身を躍らせたことである。語り手の學校教師は、いかにも合理主義者らしくこういっている。「ハウケ・ハイエンはこの洪水のとき、妻子もろとも水底に沈んだのでした。死體は海に流され、海底で元素に分解したでしょう。」しかし彼の死は救濟でもなければ、また絶對無への没入でもなかった。シュツッケルトの言葉をかりれば「より高き神話的現實への變化」をとげたのである。彼の堤防が嵐に抗して長く存續し、その名を後世に傳えているように、彼自身は亡靈となって海岸の人たちを氣づかい、戒め、勵ます力となって今もなお生きつづけている。

シュトルムには、フリースランド人特有の妖怪趣味なるものがあり、これは„Bulemanns Haus“„Am Kamin“„Renate“その他多くの作品からも知られるところである。彼はある友人への手紙のなかで「もし『白馬の騎者』のなかになお曖昧な點があるとすれば、それは傳説的素材を純人間的なものに移したことに歸せられる」といっている。しかし彼はこの作から妖怪的な特長を拭い去りはしなかった。またパウル・ハイゼに宛てた手紙（一八八六年八月廿九日）の中で、「堤防にまつわる幽靈物語を小説の四本足の上に立たせ、しかも不氣味な感じを失わせぬことが肝心なのです」と述べており、またハイゼ宛の別の手紙（一八八七年十月廿日）では「堤防監督官を幽靈の姿に變えるのは技術を要します。私はこのテーマをもう十年はやく手がけるべきではなかったかと思います」といっている。

この白馬の騎者なるものは果して實在するものなのか、それとも單なる空想の産物であるのか、或は迷信に基づく幻覺にすぎぬのではないか、という疑問が當然おこって來る。しかしこの作品においては、超自然的なものに、單に藝術的雰圍氣的な意味以上の眞實性が付與されていて、そもそも話のはじめに、白馬の傳説については何の知識も持たぬ旅人が、堤防の上で「脚の長いやせた白馬に跨り、黒いマントを肩にひるがえす、蒼ざめた顔をした人の姿」が音もなく走りすぎるのに出會っている。またその後でも宿屋で話を聞いている時、窓ごしに白馬の姿がみられ、教養

もあり理性的な學校の先生も、その存在を認めるかのように、「恐れることはありませんよ。……私はあの騎者を侮辱した覺えはありませんし、それに侮辱するいわれもありません」といっている。

馬市でハウケに白馬を賣ってから背後で惡魔のような笑い聲を立てた、鈎爪みたいな褐色の手をしたスロヴァキヤ人はいったい何者なのであろうか。このような出來事が、ハウケのような理性的な男の口から語られると、いかにも事實らしく思われ、いっそう讀者に不安を感じさせる。なおこの博勞には、クライストの「ミヒャエル・コールハース」のなかのデッベルンの皮剝人を思わせる點がある。またエルケの容態が急によくなったについても、ハウケの、神の全能に異論を唱える、あの風變りな祈りのもつ不思議な力を思わざるを得ないのである。

シュトルムの描寫はこのような妖怪的神秘的な要素の混入によって、たえず我々に不氣味な戰慄を感じさせるが、描寫の具象性によってあくまでもリアルな感じを與えている。しかもこれらは無意味な飾りでも、藝術的逃避手段でもない。しかし理性的な目から見て極めて曖昧な作者の態度は、いったいどのように説明すべきであろうか。トオマス・マンは、これを「十九世紀の啓蒙的な不信仰の子にとっては明らかに矛盾にみちたものに見える異教的民間信仰に對する（シュトルムの）心情的寛大さ」によるものと説明している。恐らくこれは我々の悟性界の外にいて、たえず侵入の機をうかがっている未知の力、不可知なる力に對するシュトルムの恐怖心に根ざすものであろう。しかし迷信的なるものが、取りもなおさず不信の一つの現れであるとすれば、これを直ちにシュトルムのキリスト教への不信に歸することは早計にすぎるであろうか。

## 三

ハウケ・ハイエンは「フリースランド人特有の長い顔から灰色の眼が前方をにらんでいた……」とか「いかにもフリースランド人らしく背が高く、利口そうな灰色の眼をもち、鼻は細く、髪を二つに分けている……」などの描寫が

物語るように、典型的な北フリースランド人であった。そして、これもまたフリースランド人の特性に數えられるように、冷静沈着な計算家であったが、内には激しい情熱を秘めており、それが外界と接触して愛や憎み、反抗や怒りとなって現われた。ハウケはシュトルムの初期の小説に見られるような、過去の追憶にふける弱々しい、夢想的な人間とは異なり、澄んだ眼で現在と未來とを見据える、恐れをしらぬ人間であった。彼は確固たる意志の持主であり、たえず行動し、創造せずにはおかぬ天才であった。少年の日に、一見ぼんやりと堤防の上にねころがっている時にも、彼は打ちよせる波と堤防の斜面の角度について思いを廻らしていた。また堤防工事の手傳いをする合間に、うつ伏せにした手押車の上に坐ってユークリッドを讀んだように、大人となってからも、與えられたものだけに滿足することがなかった。いわばファウスト的な性格の彼は、たえず前進しなければ止まず、堤防構築という大事業をはたした後も自分の土地を擴張し、倦むことなく活動した。

この堤防構築工事はハウケの創造的精神と積極的意志の所産である。彼が如何なる動機からこの仕事を決意したかについては彼自身が語っている。彼を心よからず思っていた下男頭のオーレ・ペータースが、ハウケは自分の利益から新しい工事をするのだと非難したとき、ハウケは、自分はただ妻のエールケのお蔭で堤防監督官になったのでなく、自身の力で立派にそうなり得ることを皆に見せたかったのだと答えている。これは一應うなずける話であるが、理由としてはなお不十分である。オーレの言葉は、ただハウケの行爲の外的動機にすぎず、眞の理由は彼の複雜な心の内に根をはっていると見るべきであろう。彼は堤防監督官になりたいという氣持を、すでに子供の時から抱いていたが、臨終の父の言葉によって、それはいっそう確かなものとなった。彼は決して完全無缺な偉人ではなかった。責任觀念と同時に野心も打算も、反抗も憎惡もあわせ持つ人間であった。しかし監督官という職も堤防工事も、ハウケにとっては全く本性に合った仕事であって、決して個人の野心や偶然から生れたものではない。これは正にハウケの天職であった。彼の人格と事業とは貴い犧牲死のかたちで一つに結びついたといわねばならぬ。

シュトルムはこの作で、ハウケの一生涯の極めて完全な姿を、あらゆる角度から描き出している。彼は子供の頃すでに、大人となってからの様々の性質を現わしている。既存の一切のものに疑問を抱く彼の自主的批判精神や、冒險心や、忍耐力がすでに子供のころに認められると同時に、小鳥に石を投げつけたり、猫に惨酷な復讐を企てたりする冷酷さや、激越さを見ることが出來る。荒れ狂う波に向って「お前たちに、何ひとつろくなことが出來るもんか、人間に何も出來やしないようにな」と叫ぶ彼の言葉は、一生涯彼の敵となった二つの力、即ち荒れ狂う海と反抗する大衆に對する彼の挑戰でなければならぬ。その半面「妻に對してだけは常に變らず、子供の揺籃の前には、そこが永遠の幸福の場所だというように、朝な夕ないつもひざまずく」のであった。

ハウケには過度の正義心のために亡びるクライストのコールハースを思わせるところがあるが、彼にはまたファウスト（特に悲劇第二部の）に似たところがある。即ち、ハウケもまた海と戰って陸地を獲得する。しかしその際、悪魔（白馬）の助けをかりたらしい節が見られる。彼もまた時に暴君的な振舞を見せはするが人類の恩人にちがいない。また彼は、自分がこの世にのこした足跡は永遠に消えることがないと確信している。ただファウストと異るところは、ハウケが人々の意見に屈して、あの呪うべき瞬間に努力することを止めた爲に、あの破滅をまねいた點である。そして彼にはもとより昇天による究極の救いはなく、シュトルムの考えに從えば、あらゆる生物の死とひとしく絶對無に歸すべき筈であるが、彼は亡靈となって堤防上にいまも出没しているのである。

またこの作における父と子の關係は、後期の諸作品、例えば „Carsten Curator“ „Eekenhof“ „Der Herr Etatsrat“ „Hans und Heinz Kirch“などに見られるような悲劇的對立を示しておらず、深い理解と温かい思いやりによる美わしい結びつきを見せている。これは、いわゆる父子反目のモティーフの裏がえしといわねばならない。父と子は同じ使命のもとに立ち、息子はただ祖父や父が始めたことを續ければよいのである。すぐれた精神の持主であって、愚かしい迷信ずきの大衆と衝突するハウケのなかには、「村でいちばん賢い」人間であった父と、オランダ

語でユークリッドが讀めたという祖父が生きつづけている。人間の愚鈍さと怠惰を許せぬきびしい心は、すでに父親にも見られたのであった。強い血族意識（Sippengefühl）をもっていたシュトルムにとっては、このような父祖三代にわたる繼承は重要な意義をもっていたであろう。そして没落しつつある家族（エルケの家）と、上昇しつつある家族（ハウケの家）との結びつきの結果が、ヴィーンケという白痴娘に終るという事實は、シュトルムにとって悲劇の重大な部分をなすにちがいない。また小説の冒頭で、語り手と曾祖母とを結びつけているのも、いかにもシュトルムらしく、これもまた彼の血族意識のあらわれに外ならない。

ハウケ・ハイエンの生涯の伴侶としてのエルケ・フォルケルトの姿も見事に描かれている。「二人は生れついた計算家であった」と書かれているが、二人を結びつけたものは世のつねの男女間の愛情ではなかった。お互の深い理解と信頼とであった。衆にぬきんでた二人の精神的優位が暗默のうちに二人を結びつけたのであろう。そして、この「すぐれた計算家」というテーマはこの作全體をつらぬいている。エルケの父である老堤防監督官は「種鵞鳥みたいな馬鹿な男」で全く計算能力を缺いていたが、娘のエルケは父よりも「三倍も計算が上手」であったし、ハウケもまた「ブランデーよりも石板の方が好きな若者」であった。彼が下男としてエールケの父の家に傭われてから、とんとん拍子に成功し、ついには堤防監督官の地位にまでのぼったについて、彼の計算能力の果している役割は大きい。

エルケは明朗で、怜悧で、決斷力のある女性である。彼女は父の埋葬の日に決然たる態度を示して、堤防監督長官その他の人々の面前で、暗默の婚約者であるハウケのために、監督官の地位を確保してやった。彼女のハウケに對する態度は献身的な愛情というよりは、むしろ心からなる誠實さというべきかもしれぬ。この意味から、この小説を夫婦の誠（Gattentreue）の讃美と呼ぶことも出來るだろう。他人の善意に絶望したハウケは「僕にそむかないでおくれ、エルケ。僕にそむかないでおくれ」と叫ぶ。するとエルケは彼を見あげて「あなたにそむくなですって？　いったいほかの誰になびくはずがありましょう」と答える。そして、更に夫の言葉の深い意味を理解すると、「ええ、ハ

ウケ。私たちはお互に誠をつくすのよ。お互に必要だからっていうだけではなくてね」といいそえる。最大の危険が迫ったとき、エルケは愛する夫を獨り危險にさらして自分だけ安全な場所にいるにしのびず、嵐のなかへ子供とともにとび出して行った。他ならぬこの夫に對する誠が彼女を破滅に導いたことは皮肉といわねばならない。「おお、エルケ、誠實なエルケ！」というハウケの叫びは、そのまま彼女に捧げる墓碑銘となっている。シュトルムの生涯にわたってのテーマである「愛」は、この二人の結びつきにおいて、最も成熟した表現に到達したといわねばならぬ。またエルケの姿を見れば、シュトルムの描く女性像が、彼の初期以来どんなに變ったかを知ることが出來る。初期の作品によく見られる、愛と人生とにただ憧憬を抱く、せん細な、か弱い女性が、この作では人生を見事に征服する、力強い、賢明な女性にまで成長している。行爲と決意に向けられたこの二人の生活にとっては、戀愛はもはや最高の存在價値をもつものではなかったのである。

二人の結婚後九年目に生れた娘のヴィーンケは、實は白痴であったが、その秘密をシュトルムは一枚ずつヴェールをはがすように、小刻みな暗示描寫で描いてみせる。彼女は、誕生時の「泣聲が妙にうつろで、産婆も首をかしげたり」、後には「笑わなかったり」、「眼はややどんよりと遠くを見たり」、「口をあまりきかなかったり」している。そして遂にエルケは夫に向って告白する。「何年もたってからあたしの生んだあの子は、何時までも子供のままでいるでしょう。ああ神さま、あの子は白痴です。」ハウケは「とっくに知っていたよ」といってエルケの手をしっかり握りしめる。そしてエルケは「あたしたちは、やっぱり二人きりでしたのね」という。この娘のヴィーンケは、人の世から完全にしめ出された全く孤獨な存在であって、海に對して異常な恐怖心をいだき、犬のペルレや鷗のクラウスを友とし、少し頭の狂った老婆のトゥリン・ヤンスにもっぱらなつく哀れな存在である。その老婆と娘と鷗と犬とは「共に同じものが一つ不足しているばかりに同じ茎にしっかりくっついている、不思議な四葉のクローバー」なのである。

その他の人々はもとより副人物であって、獨立的價値を與えられていないが、何れも印象的に描かれている。彼等はみな土着の人たちで、無口で、鈍重で、言葉も考えも限られた自己の生活圏外には出ないが、何物にも毒されない純粋な姿に描かれている。ただこの物語の中心をなす語り手の學校の先生だけが、教養ある人物に仕立てられており、彼は、その話を後で書きとめた旅人（即ち作の主人公）と村人たちとの橋渡しの役を演じている。つまり彼は教養層と大衆層の兩方に屬し、そのため白馬の騎者という不可思議な現象に對しても、その實在を信ずるのか、迷信だと否定するのか、彼の批判的態度には明確さが缺けている。

シュトルムの初期の小説においては、その性格描寫はおおむね類型的で、個性描寫に乏しかったが、「白馬の騎者」では類型的と個性的、象徴的と寫實的な傾向が不思議に混りあって見事な描寫技巧を示している。

## 四

この小説は形式の點でも、力強い悲劇を盛るのにまことにふさわしい。シュトルムの小説、とくに歴史小説にその例が多いように、これもやはり枠入小説（Rahmenerzählung）の形式をとっている。しかも、これは二重もしくは三重の枠にはめられている。第一の枠は、作者がもう半世紀も前に曾祖母の家のある雜誌で讀んだ話を物語る、という形式になっている。しかし、この外枠は最後には閉ざされていないから、枠というよりも、ただ單に前置というべきかもしれぬ。第二の枠の語り手である騎馬の旅人は、最後に再び姿をあらわして締めくくりをつけている。ハウケを主人公とする肝心の話は、第二の枠の中で一人の學校教師の口から長々と語られている。このような手のこんだ仕組は、あまりにも技巧的であると思えるかもしれないが、これはある距離を保ち、素材を客觀化することによって、話の眞實感をいっそう増大するための手段なのである。シュトルムは自分の主觀的抒情的傾向を意識したればこそ、わざとこのような手段を用いたとも考えられるであろう。このような奥行の深さは、物語の規模の大きさと、その意

味の深さにふさわしく思われ、それはさながら人の眼を印象深い中心の繪畫に導くところの、幾段にもなった高價な額縁を思いおこさせる。

第二の枠（一八三〇年代）と、その中で語られる肝心の話（一七五六年の出來事）とは時代をほぼ一世紀もへだてていながら、同じ環境のもとで演ぜられて緊密な結びつきを見せている。白馬の騎者の姿は、すでに枠のなかにもしばしば現われており、兩方の事件の推移は、暴風による高潮の危險という同一テーマに結びつき、互にからみあって異様な氣分をかもし出している。先生の語る話が次第にその中心へ進むにつれて、聞き手の數は次第に減って行く。そして遂には宿屋の客室から先生自身の部屋へ場所を移して、うち解けた氣分の中に、語り手と聞き手の對話の形で、ハウケ・ハイエンとその家族の運命がその最後に至るまで一氣に語られている。

この物語は便宜上三つの部分に分けて考えることが出來る。即ち、第一部はハウケの少年時代、下男奉公時代、父の相續であり、第二部は堤防監督官への就任、堤防工事であり、第三部は家庭生活、病氣、終焉である。そして、この一つ一つが纏りを示し、それぞれの頂點をもっている。第一のそれは氷上球技の場であり、第二のそれは新堤防構築の際の勞働者とハウケとの衝突であり、第三のそれは大津波の夜の場である。それらは何れもハウケの外界の諸力との戰いを示し、結末に近づくにつれて次第にたかまって行く。第三部に見られる一見しずかな落付いた場面も、實はハウケとその家族をのみこむ恐ろしい不幸の前の不氣味な静けさであって、その裡には不安と緊張がかくされている。シュトルムは様々の出來事を巧みに關連させ、全體の調子に緩急の起伏を與えつつ、大津波とハウケの死という最後の場面に、あらゆる力とあらゆる表現手段を結集している感がある。その壯大さはさながら一大交響曲のそれにも比することが出來るであろう。

シュトルムはこの作において、ハウケを中心にすえ、すべての出發點を彼におき、すべてを彼に關連させながら、様々の事件を時間の繼起に從って次々に描いて行く。ただ民間にひろまる不思議な白馬の迷信の發生を物語る場面だ

けが、直接ハウケからはなれている形ちであるが、このエピソードは、すぐそれに續く白馬の買入れの話にうまく結びつき、全體とのつながりを保っている。

晩年のシュトルムの主要な作品には、その分量の點では優に長篇小説に近いものが多いが、「白馬の騎者」も、これ迄のどの作よりも長いという點や、主人公ハウケの生涯がその少年時代から成人し、さらに死に至るまでにわたって描かれている點や、様々の場面、いろいろの要素が導入されている點などで、しばしば短篇（Novelle）ではなくて長篇（Roman）に入るのではないかが問題にされている。しかし取扱われている様々の要素も、專ら堤防を中心とするハウケ一人に關するものであり、描かれている世界も幾重もの複雜な層をなしているわけではない。またハウケの生涯にしても十分な幅と深さをもって描かれているのではなく、彼の榮進と没落という一線のみをたどっているにすぎない。また、たとえば村人たちの姿にしても、それ自身が獨立的存在價値をもっことはなく、つねにハウケの共働者か敵對者として描かれているにすぎない。

またその描寫様式も長篇のそれではくて、短篇のそれである。およそ無駄な脇道をふまず、端的な描寫をしながら生氣にみちている點や、人物を描くにも特定の視點からのみ光をあてている點や、人物をただ明確な行動や簡潔な言葉で描くに止めて、その精神像を深く堀り下げて心理的に解明しようとせぬ點や、また時間的空間的背景の敍述にとぼしい點など、すべて短篇小説の特色であるといわねばならない。このようにシュトルムは、この作品でも自己の敍事的法則に忠實であり、自らの可能性の限界をまもっている。シュツッケルトは「長篇の形式をとるためには、シュトルムには精神的には深さが、素材的には充實せる世界が、文體的には客觀的に反映さす落付きある幅が缺けている」といっているが、適切な批評である。

シュトルムの晩年の小説は、さきにも述べたように次第にその長さをましたけれども、それは長篇に近づいたというよりは、むしろ戯曲的要素をましたというべきであろう。彼自身ある全集の序文で小説について次のように述べて

いる。「小説（Novelle）はもはや以前のように、異常さによって讀者を惹きつけたり、意外な轉回點を示すような出來事の簡潔な描寫ではない。今日の小説は戯曲の兄弟であって、散文文學の最も嚴肅な形式である。それは戯曲と同様に人間生活の最も深い問題を取扱う。小説が完全なものになる爲には、劇と同様に、中心をなす一つの葛藤が必要である。これに基づいて全體の組織と、纒った形式と、不用なものの除去とが行われる。」彼は「白馬の騎者」を書き終えた後で、「もっと若かったら戯曲をやるんだが」と述べたそうであるが、これは小説制作にあたって、彼の心が長篇小説よりはむしろ戯曲の方へ傾いていたことを物語るものであろう。

堤防はこの小説において、場所と行爲の一致という戯曲的役割をはたしている。それは様々の事件が、様々の人物によって演じられる舞臺となっている。たとえば、秋になって嵐の危險のせまった時の堤防構築の場面など、大勢の人の動き、印象的な音の効果、感情の緊張などによってすぐれた劇的場面というべきであろう。

また文體そのものも、素材のもつ超自然性にもかかわらずすこぶる明晰であって、霧につつまれたような曖昧さを感じさせない。例えば下男のイヴェン・ヨーンスとカルステンとがイェーヴェルスの洲の馬の骸骨をしらべる、あの不氣味な非現實的な場面などで、特にその事が感じられる。また語り手の學校の先生は、まるで年代記の報告者のように落付いた調子で、明確適切に語っている。文章もおおむね短くて平易である。シュツッケルトの指摘するところによると、文章を支える主要な役割は動詞が演じている。特に戯曲的な盛り上りをみせる部分において、動詞は微妙なニュアンスで以て意味と重みと響きとを與えている。軟かな氣分や味わいを與える付加語のたぐいは比較的少い。そのため初期中期の作品にくらべて、文章のリズムは滑かな軟かい調子を失って、やや固いごつごつした感じを與えている。しかし、この動詞の優位は、文章にかえって力强い、ダイナミックな特長を與えているかもしれぬ。このような特長は、この作の頂點を形づくる最後の大津波の描寫において最も顯著に認められる。内容と形式、意味と旋律とが見事な調和を見せる作品というべきである。

## 五

「白馬の騎者」はシュトルムの文學の結末であると同時にその頂點でもある。彼の他の作品にも構成の巧みさや、藝術味の豊かさや、情緒のこまやかさや、さらに悲劇性の點ですぐれたものは恐らくあるであろう。しかし作の大きさと重さの點で、文體の簡潔さと嚴しさの點で、そして、それの含む意味の深さの點でこれを凌駕するものは恐らくあるまい。

しかし、シュトルム自身はこの作にあまり自信がもてず、滿足を感じていなかったらしい。その執筆中にもケラーに宛てた手紙（一八八七年十二月九日）の中で「これを仕上げる十分な力がまだあるかどうか自分にもわかりません」といったり、完成後に娘のエルザベへの手紙（一八八八年二月十七日）で「作品にすっかり滿足しているわけではない。もう十年早く書くべきだったろう」といっているほどである。それだけにまた各方面の好評は彼をひどくよろこばした。

パウル・ハイゼは五月二日に次のような手紙を彼に寄せている。「『白馬の騎者』に對しただ一言、お目出とうといいましょう。壯大な作品に私はすっかり震撼させられ、感動させられ、高揚されました。何人にも眞似ることは出来ますまい！　何れゆっくり讀みなおしたく思いますが、いま私は骨の折れる仕事に取りかかっていますので、今日は私自身が幽靈馬にのってでもいるように、息せききって驅けすぎました。ただ大急ぎで貴兄と握手し、心から萬歳！萬歳！と叫ぶに止めましょう。」

それに對してシュトルムは五月十七日に次のような返事を書き送ったが、これがハイゼ宛の最後の手紙となった。「『白馬の騎者』の讀後感を早速お聞かせ下さり、ありがとう。貴兄やエーリヒ・シュミットにそれほどの感銘を與えようとは豫期しなかったことです。シュミットは、私がそれに投入した「重さと大いさ」（Wucht und Grösse）に驚き、その中の海岸と海の情景は、その右に出るもののないような一流のものだといっています。・・[illegible]

黄病（Bleichsucht）や不眠症などですっかり弱っていて、庭をゆっくり歩いてまた部屋へ戻って來ただけで、椅子にもたれて十分間もあえがないと、元の生氣を取り戻しえないのです。……因みに貴兄及びシュミットの批判は Johannes Wedde（何人か不詳）の言葉と一致します。私は、タキトゥスがドイツ民族の特性だとたたえる sera juventus（晩き青春）の珍しい例である、というのです。もう一度お讀み下さる時にも、そのような印象が少しでも殘っていることを祈ります。」

しかしこれより八日前の五月九日には、若き友人テンニエス宛の手紙で次のように述べている。「シュミットとハイゼは『白馬の騎者』について本當によろこんだ手紙をくれました。……二人のよろこびよりも、私自身の（作品に對する）不信の方が確かだとは、自分にもよくわかっています。しかし、もはや以前ほど自分が信じられなくなった今は、それが二人に感銘を與えたというだけで、うれしいのです。それにまた、昔の仲間の一人が、最善の友の心を動かすようなものをまた書いたということは、まことに結構なことです。――だから今退場しても決して惡くはありますまい。――しかし、若き友よ、私はもう一度立ち上り、友人たちに滿足を與えることを心から望みます。そして私はその希望をまだ捨てたくはありません。」

すでに癌疾に深くおかされていた七十才の詩人のこの元氣は、たくましい創作意欲と生活意志を物語るものであるが、その背後には次のような事情がかくされていた。醫者であった彼の弟のエーミールは同僚とはかって、シュトルムの病氣は癌でなくて、たんなる胃病にすぎぬと説明した。これを信じて元氣をえた老詩人は再び執筆をつづけ、彼の最後のそして最高の作品を完成しえたのであった。

トオマス・マンは彼の「シュトルム論」の最後を次のような言葉で結んでいる。「私は、このことを最後に語りたかったのだ。彼の藝術生活の最後を飾った傑作は、好意ある欺瞞から生れたものである。詐られる素質は、彼にあっては、異常な藝術作品を完成しようとする意欲と、その生活意志から生れたものであった。」（一九五八・十一・廿二）

締切日をはるかに過ぎた今はそれ

附記　本稿中に數多く見られる作品、手紙、その他からの引用には一々注をつけるべきであるが、その暇がなく、勝手ながら一切省略し、ただ使用したテクストと參考書を掲げるにとどめる。


Theodor Storms sämtliche Werke. 8 Bde. Hrsg. v. A. Köster. Insel-Verlag. 1920.

Storms Werke. 6 Bde. Hrsg. v. T. Hertel. (Meyers Klassiker-Ausgaben).

Theodor Storm Gesammelte Werke. 6 Bde. Hrsg. v. H. Schuhmacher. Bühl-Verlag. 1947.

Theodor Storm Sämtliche Werke. 4 Bde. Hrsg. v. P. Goldammer. Aufbau-Verlag. 1956.

Storms Werke in einem Band. Hrsg. v. W. Lincke. (Die Goldland-Buch-Klassiker) 1955.

Erläuterungen zu Theodor Storms Der Schimmelreiter. (Königs Erläuterungen zu den Klassikern Bd. 192.)

Der Briefwechsel zwischen Paul Heyse und Theodor Storm. Hrsg. v. G. J. Plotke. 1918.

Bruno Loets: Theodor Storm. Ein rechtes Herz. Sein Leben in Briefen dargestellt. 1951.

Franz Stuckert: Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt. 1955.

Franz Stuckert: Theodor Storm. Dichter in seinem Werk. 1952.

Gertrud Storm: Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens. 2 Bde. 1912.

Alfred Biese: Theodor Storm. Zur Einführung in Welt und Herz des Dichters. 1921.

Elmer Otto Wooley: Studies in Theodor Storm. 1943.

Hans Eichentopf: Theodor Storms Erzählungskunst in ihrer Entwicklung. Dissertation. 1908.

Thomas Mann: Theodor Storm. (Leiden und Grösse der Meister. 1935)

Walter Silz: Theoder Storms Schimmelreiter. (Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft. Schrift 4. 1955)

Franz Stuckert: Storms Menschendarstellung. (Dichtung und Volkstum. Bd. 38.)

Franz Stuckert: Theodor Storms novellistische Form. (Germanisch-romanische Monatsschrift. XXVII. Jahrgang. 1939)